

## 第14回 5学部合同学術集会



ランチョンセミナーの様子



口頭発表の様子

3月17日(土)、医療センター大森病院5号館において「5学部合同学術集会」が開催された。今年で14回を数える同集会は、学部・学科横断的な研究発表をメインに据えた学術的取り組みだ。今回は昨年開設された健康科学部を加え、5学部が参加しての開催となった。また、演題数が増加傾向にあり、発表時間を確保するため、今回から午前スタートとなり、軽食をとりながら講演に耳を傾ける「ランチョンセミナー」が新規導入された。

開始に先立ち、山崎純一学長が登壇し、次のような挨拶を行った。「平成28年度に文部科学省の『私立大学研究ブランディング事業』がスタートし、本学の研究テーマが採択されました。これは全学的な共同研究を推進するという事業で、非常に喜ばしいことです。この学術集会は同事業の目的に合致した取り組みで、今後も大切にしていきたいと考えています。研究者同士が相互の研究を理解し合うことで新たな発想が生まれ、共同研究や共同発表の動きがさらに活性化することを期待します」

第一部は「セッション1～3」と「ランチョンセミナー」で構成された口頭発表。「セッション1」では理学部生物分子科学科の岸本利彦教授による『細胞の形質転換を指標とした慢性炎症疾患発症メカニズムの解析』、医学部内科学講座呼吸器内科学分野の磯部和順講師による『EGFR遺伝子変異陽性肺癌におけるcell-free DNAのモニタリングの有用性の検討』、薬学部公衆衛生学教室の菅野裕一朗講師による『乳がんにおける芳香族炭化水素受容体(AhR)の役割とその分子標的としての評価』の3題が発表された。

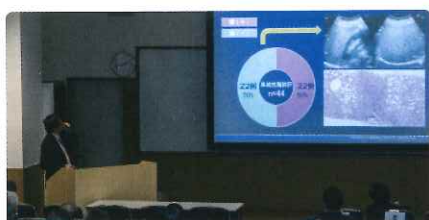
続く「ランチョンセミナー」のテーマは『東邦大学研究ブランディング事業における全学的な取り組み』。まずは医学部研究推進室の梶谷宇リサーチ・アドミニストレーターが『平成28年度選定「上皮バリア機構の不全により生じる疾患の克服を目指したブランディング事業」の概要』と題した講演を行い、その後、医学部生化学

講座病態生化学分野の山崎創准教授が、同事業に採択された研究を具体的に解説する『ブランディング事業 上皮バリア研究プロジェクトの進展と展望～皮膚と腸管上皮におけるバリア機構の解明～』という講演を行った。

「セッション2」では、医学部免疫学講座の田中ゆり子助教による『シェーグレン症候群新規分子マーカーの探索～平成29年度学内共同研究中間報告～』、医療センター大森病院消化器内科の和久井紀貴助教による『超音波検査におけるNASHの囲い込み、およびステージ診断の試み』、医学部生理学講座統合生理学分野の三上義礼助教による『糖尿病に合併した心機能障害—心筋細胞内カルシウムシグナル制御破綻のメカニズム—』、薬学部薬理学教室の小原圭将助教による『モルモット膀胱及び尿道の収縮機能に対する各種抗うつ薬の影響の評価』という4つの研究発表が、そして「セッション3」では、医学部外科学講座一般・消化器外科分野の牛込充則助教による『SEREX法により抽出した抗原の血清自己抗体による大腸癌の解析』、医学部研究推進室の梶谷宇リサーチ・アドミニストレーターによる『医学部におけるURAシステム導入と研究活性化に向けた取り組み』、薬学部薬品分析学教室の坂本達弥さん(薬学研究科博士課程3年・分子病態解析学分野)による『新規LC-MS/MS用キラル誘導体化試薬COXA-OSuの開発と生体D,L-アミノ酸分析への応用』、理学部化学,NASA Astrobiology Instituteの山口耕生准教授による『A meromictic Lake Kai-ike, southwest Japan, as a modern analogue of early Earth environments—現代に残る初期地球の模擬環境の生物地球化学の展開—』の3題が発表された。

第二部のポスター発表には31の研究グループが参加。ショートプレゼンテーションを皮切りに、4グループに分かれポスター前で発表するコアタイムを経て第二部が終了。いずれの発表においても、活発な質疑応答が交わされ、関心の高さがうかがえた。

その後に行われた懇親会を最後に、全プログラムが終了した。



口頭発表の様子